

### 古代オリエント (Ancient Near East)

19世紀まで、古代オリエントの文明はまともには取り上げられなかった。大英博物館の発掘調査団のレイヤードが、モスルの遺跡を発見、その後、発掘が急速に進むとともに、写真撮影などで現状が詳細に記録された。1980年代には紀元2000年前のバビロニアの粘土板制作の様子が記された資料まで発掘され、粘土板の作成に従事する者を描いた紀元前8世紀のアッシリアの壁画も見いだされた。粘土板は書簡としてやりとりされていた。伝説的なシュメール人の時代から、アッカド、バビロニア、アッシリア、ヒッタイトの遺跡はチグリス・ユーフラテス地域ばかりでなく、広くシリアやトルコにまでわたり、次々に発掘され、最も古くはエブラ(紀元前2200年ごろに壊滅)およびマリ(紀元前1760年ごろに破壊)

から大量の粘土板が掘り出され、その内容の解読も進んだ。それによれば、古いはもとより、呪文、頌歌、寓話、俚言から詩文までがあり、官吏の身分、商業取引の実態までが記されていた。紀元前7世紀のアッシュールバニパル王の宮殿の発掘では、粘土板の集積だけでなく、それらがどのように保存されていたかも判明している。湿っている粘土板には三角に尖った筆記具で楔型文字が彫りつけられ、これを焼いて保存する。筆記者は当時は身分が高く、世襲であるか、筆記者を育てる訓練場で育てられた。数学や医学や植物学の知識を備えた専門家もいたらしい。粘土板コレクションの管理は、分類別であり、仕分けは色などで区別しており、テーマ別に部屋が作っていた。利用は筆記者自身と宮廷内の者たちだけであって、王室の大事な記録が多かったことが知れる。紀元2000前ごろに別に個人のもとに小規模の集積があったらしいが、実態は判明していない。こうしたコレクションを果して図書館と呼べるかどうかは、研究者によって判断が異なっている。

### 古代ギリシア (Ancient Greece)

古典ギリシアの都市国家は広い範囲で散在していたため、文書によるコミュニケーションは早くから発達していた。最近の考古学研究によれば、多くの都市国家には図書コレクションがあったとされるが、その詳細は分からない。図書館についての記録の多くは、何世紀か後の筆者によるものだからである。ヘレニズム・ギリシアの学問所、特にアリストテレスの「リュケイオン」には弟子たちが記録したアリストテレスの講義テキストがあったとされ、蔵書コレクションもあったと言われる。古代ギリシアの写本はほとんどがパピルスに書かれていた。エーゲ海のギリシアの島々には「ギムナシウム」と呼ばれる体育館があって、ここは身体を鍛えるとともに教養を蓄える場であり、写本コレクションがあったといわれる。ギリシアの劇作家エウリピデスのような個人図書館を作る例も聞かれ、アレクサンドロス大王による古代世界の統一の後、各地を支配したその武将たちによりヘレニズム文化は継承された。その最大の成果が「アレクサンドリア図書館」と「ペルガモン図書館」であった。「アレクサンドリア図書館」はその保護者プトレマイオス王朝が紀元前30年にクレオパトラ五世の死によりローマ人のものとなり、「ペルガモン図書館」はエウメネス二世によりローマ帝国に献上された。古

代ローマ帝国の将軍たちによりギリシア各地のコレクションは破壊され、あるいは没収された。ハドリアヌス皇帝以下多くのローマの歴代皇帝やその臣下たちは争ってギリシア語の文献を集めた。しかし、古代ギリシア語文献の多くはビザンチン帝国のほうに流れていた。

### アレクサンドリア図書館 (Alexandrian Library)

古代ギリシアのアレクサンドリア図書館は、図書館として機能した最古の図書館の一つであるとともに、図書館の原型を示していた。紀元前4世紀にエジプトのアレクサンドリアを支配したプトレマイオス王朝初代のソケルは、ギリシア文明の威光を示すことで自国の権威を高めようと、古代ギリシア語の写本をギリシア本土から集めさせた。コレクションは次第にギリシア語以外の古代写本(ヘブライ語等)にまで広げられ、プトレマイオス王朝歴代の王はこの方針を受け継いだ。ガレノスによれば、プトレマイオス三世は港に着く船から本をすべて提出させたという。図書館は研究機関であったが、そこには写本室があり、写本の作成に力が注がれていた。初代の管理者ファレロンのデメトリオスはギリシア詩劇の写本をもたらし、ホメロス学者のゼノドトスは各種写本の決定版をつくった。カリマコスは図書館蔵書の記録を「ピナクス」に編纂した。図書館資料はナイル河に生える植物「パピルス」に筆写され、巻物本として保存された。カエサル侵略による紀元前47年のアレクサンドリアの大火で多くの資料を失うまで、この蔵書は53万巻だったといわれる。その後も図書館は存続したが、キリスト教勢力の浸透とともに、異教徒の文献を抱えるこの図書館は減じた。アレクサンドリア図書館をめぐる事情はいずれも後世の記録であり、正確さは期しがたいが、図書館が果たした役割は否定できない。この図書館の活動は図書館相互協力の原点であり、徹底した収集方針はその後の学術図書館の性格を決定した。図書館管理者は多くが文献の専門家であり、原典の年代確定や、言語学者として翻訳に従事していた。最初の蔵書目録も作られていた。

### ペルガモン図書館 (Pergamon Library)

トルコ西部の古代ギリシアの都市ペルガモンの宮殿にはヘレニズム時代の図書館があった。近年の発掘により知られるところでは、アテネ寺院に隣接して三部屋の図書館があり、約70万巻と推定される卷子ロールが所蔵されていた。アッタロス一世が宮殿を設立し、その子エウメネス二世が図書館を開設し

たとされる。紀元前133年にアッタロス三世は図書館をローマ皇帝に遺贈した。アントニウスはこの蔵書20万巻をクレオパトラに贈呈したとの説がある。パピルスはこの地に産せず、エウメネス二世の時代にはアレクサンドリア図書館との間に争いがあり、王は羊皮紙を書写の材料に使うようになった。図書館は学者などには公開されており、古代ローマに伝えられた「公開図書館」の起源がここにあったとされている。

### 古代ローマ (Ancient Rome)

実務能力で古代社会を支配したローマ人は、見せ場としての図書館を作り上げた功績を持つが、その実態を語る記録がとぼしく、多くは後世の資料に頼るしかない。紀元前2世紀にマケドニアの地を占領したローマの将軍たちは多くの書籍を持ちかえており、これが図書館の基礎となった。ユリウス・カエサルは博学のヴァロに図書館建設を命じていたが、紀元前44年に殺害された。続く歴代の皇帝は、カリグラのような破壊者もいたが、概して図書館の蔵書を誇りにしていた。多くはラテン語とギリシア語の「双子図書館」で、トラヤヌス帝の「ウルピア図書館」などが知られた。政治家ポリオや学者プリニウスなども自宅に蔵書を持っており、ローマ帝国が滅びた紀元4世紀半ばにはこうした個人図書館は28あったとされる。図書はギリシア時代と同じくパピルスか羊皮紙に記録された写本で、その貴重な価値のため外部への持ち出しは禁じられていた。大火などで失われた記録も極めて多い。写本は閉ざされた書庫内におかれ、主題で分類してあったらしいが、詳細は不明である。通例、スエトニウスなど名のある学者が管理に当たっていた。ローマ以外のゴールの地にもコレクションはあったが、蔵書はとぼしく、実態は不明である。5世紀より図書館の伝統は東ローマ帝国(ビザンチン)に引き継がれた。

### 東ローマ帝国の図書館 (Byzantine Libraries)

コンスタンチノープルを首都として紀元4世紀から約1000年にわたり栄えたビザンチン帝国における図書館の役割は、古代ギリシアと古代ローマの図書館の伝統とコレクションを近世ヨーロッパに伝えたことにある。図書館は首都ビザンツ(後のコンスタンチノープル)が中心であったが、コンスタンス二世が4世紀の半ばに開設した帝国の図書館は、13世紀まで続いており、一定の範囲の学者に開放されていた。このギリシア語とラテン語の双子図書館は西ローマの形態を受け継いでいた。大寺院の蔵書も古代からの写本をさらに拡大させたものであった。帝国には地方の各地に修道院の図書館があり、特にシナイ山のカタリナ修道院およびエゲ海のパトモス島の修道院は筆写室を備え、蓄積された写本は15世紀以降にヴァチカンやヨーロッパの君主の図書館を築いた。東ローマ帝国にはニケアやトラブゾンといった地方の都市も栄えており、ヘレニズム文化を継承し、写本の収集も、トルコ人により占拠されるまではかなり盛んであった。さらに、首都には学者の個人コレクションも見られたという。

### 初期キリスト教図書館 (Early Christian Libraries)

キリスト教の伝道は、神学者たちの文献保存・普及活動により支えられていた。紀元3世紀のテルトゥリアヌスは、異教徒からのキリスト教の擁護のため、カルタゴに図書館を構えて、聖書とその教義、祈祷書などを集めていた。古代ローマでは他にも幾多のコレクションが出来ており、オリゲネスは紀元231年にカエサレアに拠点を作り、文献を収集していた。ローマ皇帝ディオクレティアヌスは紀元303年にキリスト教を弾圧し、地中海世界の各地にあった伝道所とそのコレクションは破壊されたが、カエサレアのコレクションは難を逃れた。その後、コンスタテンティヌス帝は313年のニケア宗教会議でキリスト教を認め、330年には主要都市に配付するために聖書50部を筆写させた。各地に修道院が設立されはじめたのは紀元5世紀ころからであって、ここでは聖書の筆写が修道士の日課として課されていた。こうして、初期キリスト教の教会は、聖書とその教義解釈、聖人の業績の記録保存

の場として、西欧社会に文献重視の伝統を築いていった。キリスト教の歴史がこれらをもとに書かれたのにも古い歴史があった。

### 修道院図書館 (Monastic Libraries)

中世までのヨーロッパの図書館にあって修道院とその写本室は特別な存在であり、布教と学術の中心といえた。しかし、15世紀以後の宗教改革の時代になると、各地の修道院は変化の波にさらされた。特に北ヨーロッパでプロテスタント勢力が浸透すると、カトリック系の修道院は次々に略奪または強制閉鎖された。反宗教革命に徹したイエズス会も諸国で廃止された。わずかに残ったのはスペイン、ポルトガル、オーストリアとスイス東部の修道院であった。イギリスでは17世紀にヘンリー八世が修道院を閉鎖しており、フランス革命後、ナポレオンは各地の修道院の蔵書を集めて国立や市立図書館のコレクションに役立てていた。20世紀にイエズス会系の大学がアメリカや大陸各地で復活し、また中世写本の価値が図書館で再発見されると、修道院図書館の歴史的な意義が見直されるようになった。

### 教会・聖堂図書館 (Church and Cathedral Libraries)

初期キリスト教の普及以後、西欧では起源9世紀ごろから各地に教区教会が作られ始め、図書コレクションの存在も語られていたが、その規模は小さく、実態はほとんど記録されていない。10世紀以降の町の大聖堂のほうが図書館の存在を示していた。しかし、これも戦乱などで破壊されたものが多く、実情が把握

されていない。イタリアでは、スポレトやレッジョ・エミリア、その他の各地に教会図書館が11世紀から出来ていたが、現在まで残る例は14世紀末に設立されたパドヴァの聖堂図書館で、9世紀からの写本322冊およびインクナブラを所蔵している。ヴェローナの大聖堂は歴史がさらに古く、ダンテやペトラルカが利用したとされていたが、17世紀の戦役で蔵書は安全のため秘匿され、これは後に戻されたものの、第二次大戦の空爆で破壊された。フランスおよびドイツでは各地の聖堂が教育の場であったため、図書コレクションが存在しており、神学生たちは「鎖につながれた本」を利用していたが、両国は宗教戦争とその後の政治的動乱のため兵士たちに荒され、後に残されたものは、散逸し他所で収集された資料だけであった。ランスの大聖堂の蔵書はパリ大学の貧しい神学生に貸し出していたとの記録がある。イギリスでは戦乱で被害を受けた聖堂が比較的少なく、特にダラムとヨークの大聖堂は文人たちにも利用されていた。16世紀に修道院が解体させられると、教区の教会が出現し、トーマス・ブレイは18世紀に各地の寄付をもとに教区図書館をイングランド中に普及した。18世紀における会員制および巡回図書館の出現とともに、教会図書館の蔵書は売り渡されるか散逸してしまっ

### ヴェローナ大聖堂図書館 (Biblioteca Capitolare di Verona)

古代から中世にかけてのヨーロッパ写本の伝統は、中世の僧院の写本室で作られた。多くの僧院の写本室は文化遺産の伝承のため、古代の著作を記録し保存してきたが、多くの場合は歴史の混乱にまきこまれ、蔵書を失ったところも多かった。こうしたなか、イタリアの古都、特にヴェローナの大聖堂のコレクションは、波瀾の歴史を体験しながらも、古代の文献を写本で残した。その数は約1万点。紀元5世紀にヴェローナを征服した東ゴート族の王テオドリクスは、517年に大聖堂図書館をヴェローナに創設し、ここで古代文献の写本作業が始まった。10世紀までは古代の記録は重視されていたが、11世紀からは無視され、コレクションは荒されるにまかせられた。13世紀にイタリア各地で古代ギリシア・ローマの学問が復活し、ルクレティウス、キケロ、プリニウスその他の写本が大量に作られた。ペトラルカは1345年にここでキケロの文献を写し取っていた。17世紀の30年戦争では図書館は破壊と略奪の対象となっていたが、所蔵写本の多くはすでに他の図書館にも副本が入っていた。ルネサンスと人文主義の復興を期に、ヴェローナの市民は大聖堂図書館の新建築のため寄付を実施していた。第二次大戦で建物は破壊されたが、所蔵写本は無事であった。

### 中世の図書館 (Medieval Libraries)

古代ローマ帝国がゴート族やヴァンダル族の侵略で体制を揺るがされると、紀元4世紀に国教となったキリスト教とその図書館の伝統は、西はスペインとポルトガルに、北はドイツからイングランド、アイルランドに、西は新たにコンスタンティウス帝により創設されたビザンチン帝国に移っていった。図書館という語はギリシア語の「ビブレイオン(図書)」の「箱」を意味し、聖書(バイブル)も同じ語源であった。4世紀よりラテン語が優勢となり、「リブリ(樹皮)」が本の意味で使われるようになると、これは「リベル(自由民)」に当てはめられ、知識を身につけた社会層を意味するようになり、図書館は5世紀以降の学問の基礎を形成する体系的知識そのものとなった。キリスト教は各地に教区を広げ、6世紀にベネディクトゥスがモンテ・カッシーノに修道院を構えて以来、布教活動は修道院で生産する聖書の写本に頼ることになり、図書館は閉鎖的な「隠遁」の場となっていた。8世紀にアラビア人によりイベリア半島がイスラーム圏に入ると、キリスト教の伝統はむしろ、アイルランドからドイツ各地に逆輸入されて、フルダやザンクト・ガレンの聖堂に再現していた。9世紀に北ヨーロッパで開花したカルル大帝の「カロリング朝ルネサンス」は、こうした衰退期のキリスト教の「巻き返し」であり、独自の書物文化が復活したものであった。13世紀から解体の方向をとったキリスト教の修道院文化はイベリア半島のアラビア人から伝えられた世俗の学問の伝統に影響されたものであり、「12世紀ルネサンス」は近代ヨーロッパを準備していた。中世ヨーロッパでもう一つ、見逃してならない事実、東ローマ帝国に築かれた図書館の伝統であり、中世期の約1000年にわたって古代ギリシア文明を文献により伝え、さらに、キリスト教をさらに北のスラブの地に移植した功績を残していた。1453年に都市ビザンツを征服したトルコ人が、古代の文献遺産を破壊しなかったため、後にイタリアの諸公やフランスの国王の図書館はこれを引き取って蔵書の基礎とした。東ローマ帝国が滅びた15世紀半ばは、印刷術の開始の時期であり、この技術はまた、ルネサンスの文芸復興、宗教改革および大学の開設という近代をヨーロッパにもたらしていた。

### ルネサンス期の図書館 (Renaissance Libraries)

近世の学術は、イタリア各地で起こったルネサンス(文芸復興)により発達したが、これを支えたのは人文主義の文化人たちであり、技術的にはそれを印刷術が支援していた。14世紀のフィレンツェとヴェネツィアでは、財力を誇る貴族が写本文化を保護し、コジモ・デ・メディチの館にはニコロ・ニココーリなどの学者が蔵書の収集に当たっていた。この傾向をさらに刺激したのは、ビザンツ文化を発展させた東ローマ帝国が1453年にトルコ人により征服されたことで、西欧の領主たちはこぞってコンスタンチノーブルに学者を派遣して古書籍の獲得に努めた。15世紀半ばにはグーテンベルクの可動印刷機が登場し、印刷図書という新たな文化の時代が登場した。印刷図書はルネサンスの人文思想を支えたばかりでなく、宗教改革をもたらすきっかけを作り、大学を成立させていった。その一方で印刷図書の出現は、中世期の修道院図書館を衰退させた。図書館は刊本を得てまったく次元の異なった施設となっていった。

ラウレンツィアーナ・メディチ図書館  
(Biblioteca Medicea Laurenziana)

フィレンツェにある壮麗なラウレンツィアーナ図書館は1571年にロレンツォ・メディチにより設立されたが、このコレクションはメディチ家のコジモ・デ・メディチにまでさかのぼることができる。金融業で富豪となったコジモは、金にあかせず写本コレクションを作り上げ、フィレンツェの集書家ニコロ・ニココーリの蔵書も買い取った。彼はさらに、ギリシア地中海地方に部下を派遣して収集させたり、腕のたつ写本職人を雇ってコレクションの増加をはかった。1508年に枢機卿ジョヴァンニ・メディチがローマの邸宅に移した蔵書は1000冊に達していた。1521年に教皇が変わると、ヴァチカン図書館が関心を持ったメディチ家のコレクションは、没収を恐れてフィレンツェに戻された。ここでルネサンスの開花をもたらしたロレンツォ・メディチ公は、家に伝わるコレクションをサン・マルコ寺院に収納し、1571年に学者たちに開放した。その後、コレクションはナポレオン戦争期に差し押さえられる恐れがあったが、幸いにも被害はほとんどなく、かえって近隣の修道院の財産が追加された。ラウレンツィアーナ図書館がある建物は16世紀にミケランジェロが建てたもので、今なおほとんど変えられることなく使われている。蔵書は15.1万冊、そのうち、古代ギリシアの陶片を80点、パピルス資料を3000点、インクナブラを540冊所蔵しており、古代印刷文化史研究のメッカとなっている。

宮殿図書館 (Palace Libraries)

古代の図書コレクションの多くは、宮殿もしくは寺院の権力者のもとにおかれた。そこは権力者の威信を見せつける場であり、文献がその所有者の知的水準を示すものであっただけに当然の成り行きであった。これはヨーロッパに限らず、古代中国にも見られた現象であった。中世ヨーロッパでは、修道院図書館がキリスト教の威勢を示す装置として利用されていたが、アーヘンにあったカルル大帝(シャルルマーニュ)の宮廷図書館は、当時の錚々たる学者を集めて、大帝の文化政策を支えていた。ルネサンス期にはイタリアの諸公が競って自分の宮廷に宮殿図書館を作り、1584年にスペイン王宮が創立したエスコリアル宮殿図書館は特に素晴らしい例として今日にまで残されている。その頂点にあったのがローマ教皇のヴァチカン図書館で、ここにはスウェーデンのクリスティナ女王なども自分の蔵書を寄贈していた。宗教改革もまた、新旧両派のパトロンである諸公の図書館を強化させた。16世紀以降の近代国家の王室もまた、自分のコレクションの設立に熱心であり、あるものは国の図書館(大英博物館など)の開設につながり、ウィンザー城のコレクションのように今なお見学者を引きつけている場もある。

エスコリアル宮殿修道院図書館 (Real Biblioteca Adel Monasterio de El Escorial)

スペインのフェリペ二世は、国の威信を示すための仕掛けとして、広大な宮殿図書館の設立を考えた。16世紀にこの国はヨーロッパの広い範囲と地中海世界、さらには北アフリカと新大陸にまで勢力を広げていた。しかし、宮殿そのものの規模はさして大きくはなかった。1575年にマドリードのエスコリアル宮殿にできた修道院図書館は、その壮麗な建築で注目された。8階建てで9つの塔を備える大理石造りで、縦横が226ヤードと176ヤードの四辺形で、14のホールには9台のパイプ・オルガンが配備されていた。なかでも目立ったのは図書館で、59ヤードと10ヤードの矩形で、11ヤードの高さがある大広間形式の場で、なかには見事な製本の図書がつまっており、その華麗なさまは今でも見ることができる。フェリペ二世は、ここに古代写本からインクナブラにいたる稀観書を集めさせた。諸国からは王の威勢におもねった寄贈が相次いだ。特に集められたのはコデックス形式の聖書の写本で、その数は1万点におよび、出版文化史に知られる作品が多かった。フェリペ二世の事業は息子のフェリペ三世、孫のフェリペ四世に引き継がれた。1671年の火災は3日にわたりこの建物を襲った。4000冊のコデックスおよび2000冊のアラビア語写本が失われた。この事件はスペインの威信が傾きかけていた時期を象徴していた。現在のエスコリアル図書館には約5万冊の蔵書があり、中世コデックスが5000冊、インクナブラが700冊、版画が1万点あり、今なお中世写本および初期印刷本の豊富な見本を所有している点で文化史研究上の重要な場と見なされている。

ヴァチカン教皇図書館 (Biblioteca Apostolica Vaticana)

ローマ教皇のカトリック本山の図書館。ローマ教皇庁がラテラノ宮殿にあったところから歴代の教皇のなかで資料の価値を重んじた者

は個人的にコレクションをつくっていたが、ボニファチウス八世の1303年に宮殿がフランス軍により破壊され、資料は散逸した。続くアヴィニヨン時代、ヨハネス十二世とクレメンヌ五世が収集家として知られていたが、彼らの蔵書もまた散逸する運命にあった。教皇庁がローマに戻った14世紀から本格的な図書館作りがはじまった。ニコラウス五世が貴重書の収集を開始し、1453年にコンスタンチノーブルが陥落すると、教皇は亡命の学者たちをローマに呼び寄せ、ギリシア語の古典を翻訳させた。シクストゥス四世はヴァチカン宮殿内に図書コレクションの収蔵場を提供、ここで図書館が本格的に始まった。初代図書館長の人文学者バルトロメオ・サッチは3名の司書および1名の製本係を職員としていた。16世紀以降は多くの歴代教皇によりコレクションの増加が図られたが、なかでも1600年のオルシーニ文庫、1622年のパラティナ文庫の追加が有名で、パラティナ文庫はラテン語写本6000冊、ギリシア語写本1500冊をもたらしていた。続いて1654年、カトリック教に改宗したスウェーデンのクリスティナ女王は、ヴァチカン図書館に2120冊のラテン語写本と190冊のギリシア語写本を寄贈した。18世紀には美術コレクションもはじまり、古代ローマの貨幣コレクションが有名であったが、これはナポレオンの軍隊に持ち去られた。1902年には写本収集家として知られていたバルベリーニ枢機卿のコレクション、写本約1万冊、印刷本3万6000冊がもたらされ、図書館は貴重書の宝庫となった。1920年代には教皇がアメリカから図書館の専門家を招き、図書館の分類と写本の記述目録をアメリカ式に変えた。1952年には資料の写真複写がはじまり、1964年までにはセント・ルイス図書館がヴァチカン図書館全蔵書のマイクロ版を所有することが出来た。画廊および図書館の写本の展示室は公開されており、図書館には付設の図書館学校が毎年100名の学生を教育している。2005年現在の図書館蔵書は、写本が7.5万冊、インクナブラが8000冊、その他の蔵書が約100万冊である。